

～上方古典芸能と文化を巡る～

落語・時間を訪ねる旅

第三回

# 「阿国歌舞伎」から 南「吉例顔見世興行」

(歌舞伎)

ナビゲーター  
落語家  
林家竹丸



北野天満宮の茶店に居合わせた人々を相手に小断をひとつ。「太閤さんもこの地で大茶会を開いたとか。こうやって床几に座って断をしていますと、江戸時代の初め頃に露の五郎兵衛が辻断をしていたのも、こんな感じかと思えますね」(竹丸)

境内西側には、豊臣秀吉が築いた土塁「御土居(おどい)」の一部が残っている



## 北野天満宮



菅原道真を主祭神とし、「てんじんさん」の愛称で親しまれている北野天満宮。ここは、豊臣秀吉が天正15年(1587)に「北野大茶会」を催したところ。戦火が遠のいた後、庶民も娯楽を求めはじめ、同社境内では落語や歌舞伎の祖となる芸事がさまざまに行われたという

坂田藤十郎に市川團十郎、中村吉右衛門、片岡仁左衛門、坂東玉三郎。役者の名前はたくさん出てきても、ナマの歌舞伎は見たことない。そんな人、多いのではないですか？室町時代の田楽・猿楽から始まり、出雲阿国の「かぶき踊り」が誕生したのは、時代が豊臣から徳川の世へと移りゆく頃。北野天満宮や四条の河原、人のぎょうさん集まる場所で踊りを披露したのがルーツだそうです。その後、今日の姿へと発展してきたわけですが、歌舞伎は決して高尚なだけの芸ではないことに気付かされます。落語の断にも「仮名手本忠臣蔵」などを取り入れたものが多いです。そんな歌舞伎と落語の接点を求めて京都へ足を運んでみました。



北野天満宮にある露の五郎兵衛の顕彰碑。当代の露の五郎兵衛師匠が平成11年3月に(当時は「露の五郎」)、自身の落語家生活50周年を記念して立てたもの



北野天満宮で床几に座って断をする露の五郎兵衛(『近世奇跡考』)



林家 竹丸 (はやしや・たけまる)

落語家。本名は前田仁。兵庫県宝塚市出身。95年に四代目林家染丸のもとへ入門。天満天神繁昌亭などを拠点に、落語会に多数出演。講演、コラム執筆など幅広く活躍している。入門までの約6年間、NHK記者として徳島・大阪でニュース取材を担当した異色の経歴を持つ。2006年に第43回なにわ芸術祭(産経新聞社主催)新人奨励賞を受賞。

京都に着いて、最初に向かったのが、北野天満宮。ここは、前回取り上げた米澤彦八と並んで上方落語の祖と言われる、初代露の五郎兵衛に縁の深い神社です。今から300年以上前の貞享・元禄期、五郎兵衛は広い境内を横切る道端に舞台を設け、自作の「落とし噺」などを披露し銭を稼いだとか。

一方、歌舞伎も、それに先立つ慶長8年(1603)に出雲阿国が同社や四条河原で興行を打ったのが、その始まりと言われています。

境内を案内してくださった、禰宜の梶道嗣さんは「五郎兵衛の活躍時期の方が後れますが、太閤さんの大茶会以来、阿国歌舞伎が人気を博した流れの中でいろいろな芸能が出てきたのでしようね」とおっしゃっていました。

長い戦乱の世が終わり、人々が新しい娯楽を求めていた。歌舞伎と落語の起りは、そんな時代の要請だったのかもしれない。

今度は車で、今出川通りを東に進み、河原町通を下って新京極へ。若者や観光客が集まる繁華街として知られていますが、浄土宗のお寺が南北にいくつも点在しています。その中にあるのが目的の誓願寺。新京極通の北端に、通称「たらたら坂」と呼ばれるゆるやかな坂があり、そのすぐ近くです。

「昔はこの一帯が誓願寺の境内で、坂も、その一部でした」と同寺本山課長

御土居(おどい)は、豊臣秀吉が天正19年(1591)に、京都の周囲に築いた土塁。これにより洛中・洛外が区別されるようになったが、後に、その境界付近の各所で興行などが盛んに行われるようになった



写真提供：@KYOTOMUSE(京都国立博物館) 「阿国歌舞伎図」(部分、桃山時代、17世紀)

出雲阿国が北野天満宮の能舞台を代用して「かぶき踊り」を始めた頃の舞台を描いたものとされる。舞台上には刀を肩にかけたかぶき者がおり、阿国歌舞伎の代表的演目である「茶屋遊び」が演じられている

境内には、「北野大茶会」ゆかりの「太閤井戸」が残り、秀吉が大茶会の際に座ったと言われている場所に碑が立つ。「誰でも茶会に参加できたそうで、釜1つ、釣瓶1つ、呑物1つ、茶道具が無い者は、代わりになる物でよいとお触れが出たとか」(竹丸)



## 四条河原

四条大橋のたもとにある、歌舞伎の祖「出雲阿国」像。出雲の巫女だったともされるが、生没年は不詳。慶長8年(1603)に北野天満宮で興行を行い、男装して伊達男を演じる「かぶき踊り」で人気を集めたという。さらに、四条河原他でも勧進興行を行った



宝物殿には、豊臣秀吉・秀頼ゆかりの巨大な絵馬をはじめ、数々の国宝や重文などが展示されている。北野天満宮の由来が描かれた「北野天神縁起絵巻」(写本)を間近に見ながらお話をうかがった



の小島英裕さん。昔はすぐく境内が広がったんですね。

誓願寺は、平安時代の歌人として知られる和泉式部が往生した寺だそう  
で、その名もまさしく謡曲「誓願寺」には、式部の化身が登場します。境内には芸事に欠かせない扇をおさめる「扇塚」があり、説教から発達した講談や落語、漫才など諸芸の上達を祈願する寺として知られています。

落語とも大いに関わりがあります。江戸時代初期のこと、同寺第五十五世法主の安樂庵策伝は、布教に励むかわら、オチのある「落とし話」千余りを集めた『醒睡笑』をまとめており、そこには、落語「平林」などの原話になっている小噺などが多数あります。

同寺墓地には、文楽・歌舞伎の名作「桂川連理柵」の主人公お半・長右衛門の墓もあり、さまざまな面で芸能と結びついていることがわかります。



誓願寺では毎年10月に「策伝忌」を営み、奉納落語会を開催している。「どんな感じが量に座ってみましたか、本尊さんにも見られているようで、何とも言えない雰囲気ですな」(竹丸)



策伝上人の「醒睡笑」に出ていた笑話のいくつかを、後に露の五郎兵衛も辻噺で語ったという。掛け軸の絵は策伝上人

### 「落語と歌舞伎の間柄」…… 竹丸

落語と歌舞伎の関係にも深いものがあります。落語の「蔵丁稚」「七段目」「質屋芝居」は歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」を元にできていますし、いわゆる芝居噺は歌舞伎なしには成立しません。南座の吉浦支配人に、「下座音楽も含め、落語は歌舞伎からもらってばかり」と言うのと、「いえ「らくだ」などは歌舞伎が落語を下敷きにしていますよ」と応じてくださいました。そう、落語からも「牡丹燈籠」「真景累ヶ淵」などの怪談物や「文七元結」「芝浜」の人情噺などが歌舞伎に取り入れられています。



南座の西側に立つ阿国歌舞伎発祥地の碑

誓願寺は浄土宗西山深草派の総本山。古い歴史を持ち、清少納言や和泉式部といった女性たちから深い信仰を集めたことから「女人往生の寺」とも称される。世阿弥作とされる謡曲の「誓願寺」は、この本山の縁起に関わるもの。その中で、和泉式部は歌舞の菩薩となって現れる(「誓願寺縁起絵巻」部分、同寺所蔵)



平成17年には、坂田藤十郎が襲名披露の際に訪れ、誓願寺に記念の舞扇を奉納している



芸に励む人は、同寺の「扇塚」に、日常使っている扇を納めて芸道精進を祈願するという。また、本堂横には芸道上達の願いが書かれた扇子が奉納されている

## 誓願寺



新京極通に面してある誓願寺の入り口



「おごそかな本尊の阿彌陀如来座像を前に思わず手を合わせました」(竹丸)

### 「桂川連理柵」と落語「胴川の幸助」

今から250年ほど前のこと、京都・柳馬場押小路の帯屋・長右衛門と隣家信濃屋の娘・お半の死体が桂川にあり、世間では心中事件として騒がれた。安永5年(1776)に、これに材をとって書かれたのが「桂川連理柵」。その後、文楽・歌舞伎で上演されて、この物語は「お半・長右衛門」「お半長」として、人々に知られるようになった。落語「胴川の幸助」は、大阪での浄瑠璃を稽古していたのを実際の事件と取り違え、京都まで出てきて騒動を引き起こすという話。



誓願寺墓地にあるお半・長右衛門の墓

誓願寺をあとにし、京都に唯一残された歌舞伎の殿堂、南座を訪れました。取材時は、冬の風物詩「吉例顔見世興行」が始まる直前。出演者の名前を独特の勘亭流という書体で書いた看板「まねき」を掲げる準備が進んでいました。役者さんのほとんどが東京住まいになった今も、顔見世は役者さんにとってやはり特別の存在だといえます。顔見世を前にお忙しい支配人、吉浦高志さんにお聞きしました。

「歌舞伎は落語同様、当時の流行を素早く取り入れて演じていたもの。気楽に見ていただいていたのです。南座は、先日の五代目桂米團治さんの襲名披露公演の初日の劇場でしたし、落語との相性もいいんですよ」と吉浦さん。豪華絢爛さ、様式美、伝統の重み、そして都会特有の猥雑さ。どれも歌舞伎の魅力。時間を忘れて、芝居小屋でしか体感できない世界にひたれば、心のゼイタクを味わえるはず。

いっぺんやってみてみたいのは、舞台の役者さんに「なりこまやっ」「なかむらやっ」と客席から声をかけること。声は届くでしょうが、タイミングがねえ。もう少し勉強してからにします。(談)

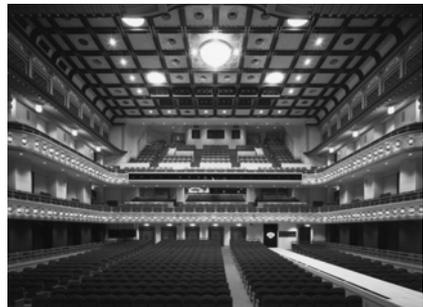


仮名手本忠臣蔵で、大星由良之助(大石内蔵助)が敵の目を欺くために放蕩した遊里祇園は南座のすぐ近く

南座の舞台と客席

## 京都南座

江戸時代初めの元和年間、四条河原付近には公許された芝居小屋が七座あったという。そのうち、現在まで続いているのは南座だけになっている



毎年12月は、東西の名優が顔を揃える「吉例顔見世興行」が行われ、京都の冬の風物詩となっている。現存する桃山風の劇場建築は昭和4年(1929)に竣工、平成3年(1991)に外観を残しつつ最新設備を備えた劇場として改装され、平成8年(1996)には国の登録文化財となった

南座正面に飾られた「吉例顔見世興行(平成20年)」のまねき。まねきは、江戸時代中期から見られる庵形の看板で、大入りを願いに丸まった独特の字体「勘亭流」で役者の名が書かれている

建設時の雰囲気を残すロビーや通路。照明などの意匠もアール・デコ調で、当時のものを再現している



ロビーに飾られているのは、昭和2年の南座を描いた絵。舞台は『勘進帳』で、満員の棧敷席に日本髪の女性も多く見られる。正面の櫓の下には、まねきと絵看板。「80年ほどの吉例顔見世興行ですね」と吉浦支配人

